

黙示録9章1-11節 「底知れぬ所からの大群」

1A 天から落ちた星 1-2

2A サソリのような力 3-6

3A いなごの姿 7-10

4A 破壊の王 11

本文

黙示録9章を開いてください。今晚は、1-11 節を見ていきます。(本文を読む)

今晚は、私たちは、前回、第七の封印が解かれた後に、七つのラツパが吹き鳴らされる災いが始まったところを見ていっています。主が、ラツパによってご自分が戦われていること、裁かれていることを示しておられます。初めの四つのラツパでは、地上の三分の一、海の散文の一、陸の水源地の三分の一、そして、太陽や月、星の三分の一が暗くなったことを見ました。このように、主の造られた被造物を、ご自身が損なわれて、彼らが創造の神をあがめるように仕向けておられます。そして残りの三つの災いについて、「わざわざだ、わざわざだ、わざわざだ」と叫ぶ、中空を飛ぶ鷲がいました。さらにその災いの度合いが激しくなるからです。9 章においては、自然界ではなく、霊の世界において、神がこれまで閉じ込められていた悪霊どもを解き放ち、地上の人々に苦しみを与える災いを見せています。

悪霊どもが、人々を苦しめるということ、聖書の中に出てきます。悪霊に悩まされ、苦しめられるのは、主の命令に従わない者たちが多いです。サウルは、主の命令にしたがわなかったため、神からの悪い霊によって、狂い喚きました。(I サム 18:10)。イスラエルの王アハブは、主から裁かれ、殺されます。アラムとの戦いに勝つことができるという偽預言を、ある霊が偽りの霊となって預言者たちに入って行きました(I 列王 22:19-23)。

そして、新約聖書に入ると、非常に悪霊の働きが多くなります。黙示録 12 章には、メシアが世に現れる時に、天から三分の一の使いが悪魔によって引き落とされると書いてあります。イエス様が世に来られたら、その宣教は、悪霊追い出しでありました。使徒たちも同じ権威が与えられて、悪霊を追い出していきました。そこで興味深いことを主は言われます。汚れた霊が、自分たちが出てきた家に戻ったら、家が空いていて、掃除がきれいになされていて、片付いていたというのです。それで、自分よりも悪い、七つの他の霊を連れて来て、入り込んで住み着いたとあります。(マタイ 12:43-45)イスラエルの民が主を拒んだので、まるで空き巣のようになってしまい、悪霊どもが苦しめていくということです。

このように、悪霊が人々を苦しめるというのは、現実にあります。今に至るまであります。福音は、悪い者からの解放を与えます。しかし、悪霊どもは何かして、私たちを惑わし、福音の真理から引き離そうとしています。「I テモ 4:1 しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。」拒ぶ者たちには、悪霊どもによる災いが下るのです。

1A 天から落ちた星 1-2

¹ 第五の御使いがラッパを吹いた。すると私は、一つの星が天から地に落ちるのを見た。その星には、底知れぬ所に通じる穴の鍵が与えられた。

「一つの星」ですが、これは8章10節の苦よもぎと呼ばれる大きな星が落ちたというのは、意味が違います。8章のは文字通りの巨大な隕石です。9章は読み進めれば、11節に「底知れぬ所の使い」であります。墮落した天使であり、サタンのことです。黙示録、そして聖書では、御使いのことをしばしば「星」と形容しています。

この星が、「天から地上に落ちるのを見た。」とあります。サタンは天使長であり、神のそばにいた栄光に輝く存在でありましたが、高ぶって墮落して、その領域から落ちたことが書かれています。(イザヤ 14:12-15) サタンは、主のすぐそばにいた御使いなのに落されて、空中に権威を持つ者となりました。そして、さらに落されて地上に、地上から底知れぬ所に行き、そして最後は底知れぬ所から火と硫黄の燃える池、ゲヘナに投げ込まれます。悪魔は高ぶり、自分を引き上げようとするのですが、神はそれを低くしていかれませぬ。逆に自分を低くする者は、神は高くしてくださることを、イエス様は約束されていましたね。

イエス様も、天からサタンが落とされたことを語られました。七十人の弟子がイエス様のところに帰って来て、悪霊どもが、イエス様の名の権威に服従するのを目撃しました。それで、主がこう言われます。「ルカ 10:18-19 サタンが稲妻のように天から落ちるのを、わたしは見ました。19 確かにわたしはあなたがたに、蛇やサソリを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けました。ですから、あなたがたに害を加えるものは何一つありません。」天から落ちましたが、イエス様は、弟子たちに蛇やさそりを踏みつけ、敵に打ち勝つ権威を与えられたと約束されます。これから、さそりのように害を加えることのできる悪霊どもが出て来ます。しかし、これらの力に打ち勝つ権威が与えられたのだ、ということです。そして害を受けることはないとの約束です。「1ヨハネ 4:4 子どもたち。あなたがたは神から出た者であり、彼らに勝ちました。あなたがたのうちにおられる方は、この世にいる者よりも偉大だからです。」

そして、「底知れぬ穴」を開く鍵が与えられたとあります。聖書の中には、地獄のことが啓示されています。地の下にある獄屋ということですね。主に三つの種類に分かれます。一つは、「陰府」で

す。以前はハデスと訳されていましたが、旧約聖書の陰府と同じように訳しています。死者が下るところであります。ヨブ記には、こう書かれています。「26:5-6 死者の霊たち、水に住む者たちはその底で、もたえ苦しむ。6 よみも神の前では裸であり、滅びの淵もおおわれることはない。」海底のさらに奥にあるところ、また、ある箇所では、地の下にあると書かれています。実際、コラがアロンとモーセに逆らったときに、地が割れて、地がコラを飲み込んだとありますが、モーセはそのことを、「よみに下る(民数記 16:30)」と言いました。主は、パリサイ人に、もう天からのしるしはないと言われて、「人の子も三日三晩、地の中にいるからです。(マタイ 12:40)」と言われました。主は、十字架につけられた後、ハデスにおられ、それからよみがえられたのですが(使徒 2:31)、そのことを「地の中」と言われています。

そして死者が行くハデスは、ルカ 16 章によると、二つの部分に分かれていることを読むことができます。一つは、「アブラハムのふところ」と呼ばれるところで、神の約束を待ちながら死んだアブラハムとともに約束が実現するまで待っている、慰めの場所です。もう一つは、熱さの中で苦しみを味わう場所で、前者にはラザロが、後者には金持ちが入りました。この、アブラハムのふところのほうは、主が陰府に下られて、よみがえり、天に引き上げられるときに、彼らもまた引き上げられ、天の中に入ることができるようになりました。罪の贖いは、動物の血では完全ではなかったもので、彼らは天国に入ることができていませんでしたが、御子の血が流されたことによって、罪が取り除かれ、天に入ることができるようになったのです。残りは、最後の審判の時に死とハデスが死者を出した、と黙示録 20 章にあります。その時に不信者は甦り、神の裁きを受けて火と硫黄の池に投げ込まれます。

ですから、陰府があります。さらにゲヘナがあります。ゲヘナは、エルサレムの町の南にある「ヒノムの谷」から来ている言葉ですが、そこでは絶えず、動物のいけにえの老廃物などが焼却されていました。そのため、火が永遠に燃えているところとして、ゲヘナは、永遠のさばきの場として設けられています。ゲヘナは、元々、悪魔と悪霊どもが投げ込まれる場として作られました。イエスは、「悪魔とその使いのために用意された永遠の火に入れ。(マタイ 25:41)」と言われます。けれども、悪魔の惑わしに従う人々は、悪魔とともに永遠の火の中に投げ込まれる運命を辿るのです。

そして、この他に「底知れぬ所」があります。これは、「底がない縦穴」という意味です。ここは、墮落した天使どもを閉じ込めておくところであると考えられます。ユダの手紙には、「6 またイエスは、自分の領分を守らずに自分のいるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の鎖につないで暗闇の下に閉じ込められました。」とあります。先ほど底知れぬ所は、主が地上に再臨された後、悪魔が千年間、鎖につながれることとなります。ゲラサ人の地方で、イエスさまがレギオンという悪霊どもに対峙されたとき、レギオンは、「底知れぬ所に行けと自分たちにお命じにならないように(ルカ 8:31)」と言いました。それで、豚の中にはいれ、とイエスさまは命じられました。ですから、地上に徘徊している悪霊どもがいるし、既に底知れぬ所に閉じ込められて

いる悪霊どももいます。そして、患難期半ばに、死んだようになって甦ったとされる獣、反キリストが、「底知れぬ所から上って来る獣(11:7)」とあります。獣が一度、底知れぬ所に落とされても、鍵を与えられていた悪魔がそこから上らせて、自分の位、力、権威を与えるのです。

このように、いわゆる「パンドラの箱」のような、「開かずの扉」のような存在であった底知れぬ所、凶悪犯が収監されているような所を、神がサタンに対してそれを開く鍵を終わりの日に与えられます。それで地上が、文字通りの「生き地獄」になるのです。まだ死んでいないのに、この地上で死んだ後の苦しみを味わいます。

ところで、なぜ、「鍵が与えられた」のでしょうか？主ご自身は、「死と陰府の鍵」を持っておられる方としてヨハネに現れました(1:18)。底知れぬ所の鍵も主が掌握しておられたと思います。しかし、サタンに任せられるのです。それは、福音の真理を受け入れない者たちに対する、裁きであります。これまで、主が悪霊どもの活動を抑えておられましたが、福音を拒むことによって、サタンが悪霊どもを通して苦しめるがままにさせるのです。

² それが底知れぬ所に通じる穴を開くと、穴から大きなかまどの煙のような煙が立ち上り、太陽と空はこの穴の煙のために暗くなった。

まるで、地の下のマグマから煙が上がっているかのように、煙が上がっています。神がソドムとゴモラを裁かれた時に、同じようにかまどの煙が上がっていました(創世 19:28)。また、神は、ご自分の畏敬を現すために煙の中で現れました。「出エジプト 19:18 シナイ山は全山が煙っていた。【主】が火の中であって、山の上に降りて来られたからである。煙は、かまどの煙のように立ち上り、山全体が激しく震えた。」神が、底知れぬ所にご自分の裁きを現しておられたのですが、それが開かれるとその煙が立ち上ったのでしょう。

ところで、この黙示録は七つの教会に対して書かれているのですが、ラオディキアのそばにはヒエラポリスという町があります。コロサイ書に、ラオディキアと共に出てくる町です。そこは温泉が出ます。そこに二酸化硫黄が出てくる箇所があります。それを吸引すると、脳を破壊し、死ぬかもしれません。けれども、アポロン神殿の祭司がそこに入り、出て来て、幻覚を見てお告げを語るのです。そして、ギリシア神話では、ハデスという神が地下の世界になると信じられていました。ですから、ヨハネの見たこの幻を聞いた時には、彼らには身近な光景だったのです。

そして、「太陽と空はこの穴の煙のために暗くなった。」とあります。これは、ヨエルの預言にも書かれています。五旬節の時にペテロが引用した箇所です。「使 2:19-20 また、わたしは上は天に不思議を、下は地にしるしを現れさせる。それは血と火と立ち上る煙。20 主の大いなる輝かしい日が来る前に、太陽は闇に、月は血に変わる。」ところで、黙示録 9 章はヨエルに神が与えられた

預言が色濃く成就しています。

2A サソリのような力 3-6

³ その煙の中からいなごが地上に出て来た。それらには、地のサソリが持っているような力が与えられた。

これは、文字通りのいなごではありません。ここに書かれているとおり、さそりの持つような力があり、また後に出てくる描写を見ても、彼らは昆虫のいなごではありません。けれども、いなごのような災いをもたらします。聖書に出てくるいなごの災いは、出エジプト記の十の災いの一つが有名です。雹が降った後に、いなごの大群が押し寄せました。雹が降って、地の作物は大きな被害を受けましたが、まだ芽の状態であった作物は害を受けませんでした。ところが、いなごの大群が襲ってきて、芽もすべて、文字通り根こそぎ作物という作物を食べ荒らして、通り過ぎたのです。

そして、直接的には、いなごの大群による災いがヨエル書に預言されていて、その成就がこの9章で見られるということです。ヨエルは、度々訪れるいなごの大群による被害をとおして、イスラエルが敵によって攻められることを預言しました。そしていなごのようにして、とてつもない数の騎兵が国々を荒らすことを連続して預言しています。ヨエル 1章 2-6節まで読みます。

2 「長老たちよ、これを聞け。この地に住む者もみな、耳を傾けよ。このようなことが、あなたがたの時代に、また先祖の時代にあっただろうか。3 これをあなたがたの子どもたちに伝え、子どもたちはその子どもたちに、その子どもたちは後の世代に伝えよ。4 噛みいなごが残した物は、いなごが食い、いなごが残した物は、バツタが食い、バツタが残した物は、その若虫が食った。5 目を覚ませ、酔いどれよ。泣け。泣き叫べ、すべてぶどう酒を飲む者よ。甘いぶどう酒があなたがたの口から断たれたからだ。6 ある国民がわたしの国に攻め上って来た。それは力強く、数えきれない。その歯は雄獅子の歯、それには雌獅子の牙がある。

⁴ そして彼らは、地の草やどんな青草、どんな木にも害を加えてはならないが、額に神の印を持たない人たちには加えてよい、と言い渡された。

この悪霊どもの災いは、先の自然に対する災いとは異なり、人間にだけ害を与えます。草木を食い尽くすいなごとは正反対です。ちょうど中性子爆弾が、建築物などは破壊せずに、生きている物だけを殺傷するように力を持っているように、生きている人間だけに害を与えるのです。

しかし、「額に神の印を持たない人たちには加えてよい」とあります。7章で、14万4千人のイスラエル人が額に神の印を押されたところを読みました。彼らは患難期を通り抜けて、主イエスが地上に戻って来られるまで守られます(14章)。エゼキエル書にも、神殿の中で神の印を押されてい

る者たちは、殺される者たちに数えられなかったことが書かれています。神は、このいなごのような悪霊による災いから守ってくださるということなのです。

⁵ その人たちを殺すことは許されなかったが、五か月間苦しめることは許された。彼らの苦痛は、サソリが人を刺したときの苦痛のようだった。⁶ その期間、人々は死を探し求めるが、決して見出すことはない。死ぬことを切に願うが、死は彼らから逃げて行く。

この災いの目的は、「死なないで苦しめる」こととあります。「五か月間」とありますが、いなごの生きているのは、5月から9月という五か月間と言われています。その間のみ、彼らを苦しめます。死にたいほど苦痛なのに死ねないというのは、恐ろしいことです。例えば、拳銃自殺をしたところで、自分の頭が半分なくなったとしても、それでもその痛みを伴いながら生き延びてしまいます。ヨブが、死にたいのに痛みの中にある苦しみを次のように言い表しました。「3:21 彼らは死を待つが、死はやって来ない。隠された宝にまさって死を探し求めても。」ヨブの場合は試練ですが、ここでは神は不信者らに、「死んだということは、意識がなくなるということではないのだ」と、死後の苦しみについて教えられたのだと思います。金持ちとラザロの話を出していただくと、金持ちは陰府において苦しみ悶えています(ルカ 16:25)。この陰府における苦しみを、今、この地上において苦しまなければいけない、ということです。

3A いなごの姿 7-10

⁷ いなごたちの姿は、出陣の用意が整った馬に似ていた。頭には金の冠のようなものをかぶり、顔は人間の顔のようであった。⁸ また、女の髪のような毛があり、歯は獅子の歯のようであった。⁹ また、鉄の胸当てのような胸当てを着け、その羽の音は、馬に引かれた多くの戦車が戦いに急ぐときの音のようであった。¹⁰ 彼らはサソリのような尾と針を持っていて、その尾には、五か月間、人々に害を加える力があつた。

おぞましい姿です。いなごとと言っても、いなごのような群れによってやって来るということだけで、その姿はこの世のものではありません。悪霊の世界というのは普段、見聞きしません。しかし、オカルトに携わって悪霊に遭遇した人々は、おぞましい姿を生で目撃しています。麻薬をやりながら、そのようなオカルトにはまっている人もいますし、また不品行を伴っている場合もあります。実に、初代教会の時は、オカルト、偶像礼拝、薬物、淫行と混じり合わせて行っていたことを、私たちは七つの教会の町々の背景で学んでいました。「サタンの深み」という言葉があります(2:24)。

また、この容姿は、他の聖書の箇所に出て来る、いろいろな存在とも相重なっています。金の冠とありますが、24 人の長老たちも金の冠をかむっていました。顔が人間の顔ですが、四つの生き物、またケルビムも人間の顔を持っていました。そして長い毛があり、それから歯が獅子の歯のようだとありますが、ダニエルの見た第一の獣は獅子であり、第四の獣は、鉄の牙を持って

いましたね。そして鉄の胸当てですが、鉄はローマの粉々に打ち砕く力を示していました。そしてそのダニエルの見た獣と同じく、翼を持っています。そしてその翼の音が、戦いに急ぐ時の響きであるとありますが、ケルビムが翼を動かすと、大水の轟のようである、陣営の騒音のような大きな音だとあります(エゼキエル 1:24)。いろいろな意味で、墮落した天使の姿をしております。そして最後に、尾を持っていて、それがサソリのような尾と針を持っています。イエス様は、蛇やさそりを私たちが踏みつけると約束してくださいましたが(ルカ 10:19)、悪魔がもたらす痛みと苦しみです。

4A 破壊の王 11

¹¹ いなごたちは、底知れぬ所の使いを王としている。その名はヘブル語でアバドン、ギリシア語でアポリュオンという。

実際のイナゴは箴言 30 章 27 節に書かれているように、王はなく、隊を組んで出て行きます。けれども、ここでは王がいます。彼は、底知れぬ所の王として、後に獣をそこから上らせ、彼に位と、力と権威を与えるのです。そして彼の名は、「アバドン、アポリュオン」とありますが、どちらも「破壊」という意味です。破壊者です。これが悪魔の名前です。私たちを破壊します。「ヨハネ 10:10 盗人が来るのは、盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするためにほかなりません。わたしが来たのは、羊たちがいのちを得るため、それも豊かに得るためです。」

このように、悪霊どものおぞましい災いが下ります。私たちは、このようなおぞましい姿を、まだ見ずに済んでいます。その兆候は表れています。例えば、ロシアがウクライナを、あえて民間人に攻撃して死なせて、攻め取ったところでは女を、その子供たちの前で凌辱し、悪霊どもによってでなければできない蛮行を働いています。そして人々は、あらゆる悪を行っていきますが、主は、悪に対して悪で裁かれます。そのような悪霊によって突き動かされているものは、悪霊どもによって痛めつけられるのです。「Ⅱテサ 1:6-7 神にとって正しいこととは、あなたがたを苦しめる者には、報いとして痛みを与え、7 苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えることです。このことは、主イエスが、燃える炎の中に、力ある御使いたちとともに天から現れるときに起こります。」